『導引口訣鈔』にみる病伝の文献的解釈について

坂本[1)]　秀治、市川[2)]　太郎

素問風論（四十二）に「風は百病の長なり」とあり同じく玉機真藏論（十九）にも「是の故に風は百病の長なり」とある。風は百病に先んじて有るものである。即ち百病に先だちてあるものとか、あるいは風は百病の如きなり（生気通天論）とか百病の代表者なりとしている。玉機真藏論においてはそれからさらに病が五臓間を相互伝移する場合の次序並に逆常転移の原因と根拠について説いている。

導引口訣鈔に病の転移について「六腑の病五臓に移る」と述べており、六腑から五臓に移る疾病について、たとえば脾に移る胃の疾病、心に移る小腸の疾病の症状。肺に移る大腸の疾病。腎に移る膀胱の疾病。脾に移る肝の疾病の症状などについて詳述している。（但し胆は肝の短葉の間にあるので按喬しにくいため肝を療治してから胆病を治すとしており、それ故肝胆の関係だけは逆になっている。即ち「肝の疾病胆に移る」ことになっている。）肝は筋絡藕糸を主ることになり五行的に見ればよく符合する訳であり肝の療治としては按喬が適することになる。

これらのことは現代的な感覚からは理解しにくいとされているが内経・難経などの古典的文献の記載から検討を加えた。

一年十二ヶ月は人の三陰三陽の十二脈（十二経脈）に応ずる。十二脈は五臓六腑と心包絡（膻中）に連なる。

経絡系統と十二経脈の気血の流注の次序は霊枢経脈篇によれば手の太陰肺経にはじまり足の厥陰肝経に注ぎ一周するときはまた元の肺経に次のように伝注する。

母指端↑（手太陰肺経）↑肺↑中焦
←示指端↓（手陽明大腸経）↓大腸↓鼻
第二趾↑（足陽明胃経）↑胃↑眼←
←第一趾　（足太陽脾経）↓脾
小指端↑（手少陰心経）↑心

小指端←（手太陽小腸経）→小腸→耳
第五趾←（足太陽膀胱経）→膀胱→眼
足底部←（足小陰腎経）→腎
中指端←（二十厥陰心包経）→心包
環指端←（手少陽三焦経）→三焦→眼
第四趾←（足少陽胆経）→胆→眼
第一趾←（足厥陰肝経）→肝

これを陰陽的に分類整理したのが、よく知られる経絡臓腑流注表である。

一方素問病伝論後半において、病の転移、病状の変化などについて教示しているが、そこでは、

「腎病少腹腰背痛胻痿。三日背脛筋痛小便閉。三日腹脹。三日両脅支痛。三日不已死。冬大晨。夏日安脯。」と。これと並んで

「膀胱病小便閉、五日小腹脹、腰背痛胻痿。一日腹脹、一日身体痛、二日不已死。冬鶏鳴。夏下脯。」とあるように膀胱の疾病（陽病で腑病）転移して腎の疾病（臓の病で陰病）の症状を示す。

先程の、病が五臓間を相互伝移する場合の次序について説いている玉機真藏論の中で、「弗治腎伝之心病筋脈相引而急病日癃。当此之時可灸、可薬」と述べている。これについて王冰注は「腎不足なるときは、則水生せず。水生せざるときは則筋躁急なり」。としているが、これに対して柴崎氏は「病は已に腎に伝わっているにも拘らず、腎の病状が現われるのはおかしい。むしろ心の関係であるべきだ」として疑義を投じられた。

これらの症状は導引口訣鈔に挙げている「小腸より心に移す病証（即ち六府より五臓に移す病証）」にほぼ符合する。

しかし玉機真藏論王冰注に述べるような「腎の異常で筋に水分がなくなる」とすることに対する臨床的説明にはならない。

以上のように導引口訣鈔の「六腑の病五臓に移る」という理論は七伝・間臓の伝変について教示する五十三難と、これと密接に連なる「臓病（陰病）は治し難く腑病（陽病）は治し易しの」五十四難にみられるごとく、このように難経が教えるように病の伝変を相尅（七伝）と相生（間臓）

の二つに簡潔直裁的に分けて考えようとすると理解し難いものとなるが、しかし煩雑とされる素問（標本病伝）、霊枢（病伝論）の説に従って論ずればむしろ理に適ったものと解される。

1）（関西鍼灸短期大学）
2）（南小岩接骨院）

『横浜軍陣病院の日記』を再読して

中西淳朗

慶応四年の戊辰戦争のさい、W・ウイリスによって、いわゆる横浜軍陣病院が開設されたが、病院の所在地については二説ある。

即ち、①野毛の修文館と洲干弁天の仏語伝習所、②野毛の修文館と野毛山下の太田陣屋、の二説である。

①説は、大久保利謙氏の指摘のごとく、『横浜軍陣病院の日記』、『復古記』と符合しないが、その後の各氏の研究によっても①説を否定する論拠は明らかではない。

演者は、一九八六年の関西支部春季大会において「横浜仏語伝習所、太田陣屋、修文館の相互関係について」と題して発表した。

即ち、太田陣屋と仏語伝習所は慶応元年の伝習所開校以